

人間活動における責任としての美の再生： 新しいレジャー論のために

犬塚潤一郎（実践女子大学）

レジャーについての基礎論的探求をするにあたっては、対応する社会の構造的変化への考察が不可欠である。もとより現代のレジャー論は、産業革命以降の、あるいは日本においては高度成長期以降の、社会構造変化に対応するかたちで生まれたものであるからである。そして今日の社会構造が、いわゆる近代型の産業社会からの転換をはじめているのであるとすれば、レジャーを考察するための枠組みも変化せざるを得ないだろう。

レジャーの意味を、人間にとっての拘束活動からの自由な時間とみなすとしても、拘束活動の内容となる生理的・必要や生活活動、労働・役務などの実質的内容が、今日大きく変化してきている。家庭労働や仕事の中に、従来の意味では自由な生産活動と区別できないものの割合が増加してきているためである。それは、生産-消費および生活の、相互関係構造の変化によるものである。たとえば生活活動の領域を表現する言葉に“衣・食・住”があるが、今日その3領域はほぼすべて消費活動によって実現されている。また生活の他の2領域である“遊・学”も、産業的仕組みへの回収を深めていっそう消費型の傾向を強めている。そして一方、その消費を支える金銭的収入の主要な源は企業組織労働への従事であるが、現代の産業は知識型(情報・記号型)を主要なモデルとし、記号的生産の割合を増加させている。つまり、生活と労働の内実そのものにおいて、従来のレジャー活動のかたちとの区別がつきがたくなっているのだ。

そのためレジャー論は、労働と対比的にレジャーを捉える枠組みによるのではなく、労働と生活そのものの変化に応じるように、産業との結びつきを深めて、レジャー産業や消費文化といった領域を研究対象とするようになった。しかし社会構造の変化はそこからさらに進み、産業主導の、あるいは経済成長を社会発展の主要原理とすることからの、転換を必要とする段階に至っている。その理由は、地球環境問題に明らかのように、現在の産業発展(グローバル市場、金融・記号型商品)の原理が、温暖化・気候変動やエネルギー・資源枯渇に代表される地球の物理的限界に至ったこと、また同時に、自然的・伝統的に形成されてきた人間社会の拡張限界に至ったことによる。産業社会における環境制約と社会格差・不公正の問題は、工業技術や政策の問題にとどまらず、近代的人間像・社会観の基礎モデルの転換を必要としている。そしてそこにこそ、レジャー論の新たな射程が見出されるのではないだろうか。

近代原理はその基礎に、主体の理念の無限定な拡張性向がある。それは時間と(特に)空間の圧縮として社会化する。この社会における成功者はほぼ地球規模の次元を生き、一方敗者はその社会的剥奪と退行の結果として地域(ある空間、および時間)に縛り付けられる。距離と速度の社会性が劇的に変化し、エリートは境界を越えた独自の文化圏を形成する。

近代原理の批判はそこで、脱成長の現れとして、地域的・集团的・個人的なものの再生への志向を明らかにしてゆくのであるが、先に見た生活と仕事の消費への一元化体制は、そ

のような試みを現実的に困難にしている。かつて労働からの、自然的・社会的制約からの自由を目指したレジヤールは、この自然・社会収奪体制からの自由こそ、新たな場を見出すべきだろう。

この新たなレジヤールを論じるにあたっては、近代原理の社会的現れである“分断”への批判からはじめることができる。かつてモリスは、生活と労働の芸術化による社会進歩を説いたが、それは便利さ (use)と美しさ (beauty)という二つの要素を結合する総ての試みとして述べられた。優れた建築や制作を可能にするのは、品物一個を作るのにも一人の人間の全体を投入するやり方であり、多くの人達の部分部分を小出しにするのではないと論じられた。しかし、今日の生活と労働を支配する主要な概念が美であることは事実であるとしても、その生産様式は徹底した分業化による生産性向上であり、生み出された美は絶え間なく消費され続ける。美を生産・消費するこの社会の生活と労働の実質は貧困である。

新しいレジヤールは、自然と人間・社会の制約と美しさを、個々の人間の活動の内に結合するかたちを目指すことから、その探究がはじまるのではないだろうか。

美を追究する人間活動である芸術は、近代以降その歴史の上で、社会からの一方的な自立の道を歩んできた。宗教からの人間性の自由、権力から市場への自由、ものの本源からの人間の創造性の自由などである。今日芸術行為の根拠は、人間個人の内面に一元化されている。美と真理、美しいことと正しいこととのあいだの統一は、既に破棄されて久しい。

損なわれていない全体性や統一の回復、それを美と人間活動のあいだの、今日的芸術領域にとどまらず生活と産業・社会の活動一般において、問い直すことを新しい状況を迎えたレジヤール論の課題として問いたいと考える。